

献 辞

2014年3月25日、人文学部人間関係学科社会学専攻所属の日隈健壬先生が、ご退職まであと数日を残して急逝されました。ここに衷心よりご冥福をお祈り申し上げますとともに、1983年4月の本学赴任以来31年間、その前年の非常勤講師としての1年間も合わせますと32年間の長きにわたって、研究・教育の両面から本学の発展に寄与してられました日隈先生に敬意を表し、届かずとも心から感謝申し上げたいと思います。

日隈先生がご専門とされた社会学の門外漢である私が申しまして何ら説得力がないことを承知の上で、先生のご研究やその他の活動のスタイルを一言で表すならば、「グローバルとローカルのしなやかな融合」ではなかったかと思います。巻末に掲載されております先生のご業績を眺めれば、ローカルには、広島県や広島市をはじめとしたこの地域が抱える課題に関する数多くの研究があり、一方、グローバルには、ネパール、パラグアイ、韓国、フィリピンの社会が抱える問題に着目した一連のご研究があります。いずれのご研究も、緻密な調査に基づく実証的なものであることは、先生の研究スタイルからすれば当然のことでしょう。特筆すべきは、これらの研究全体を通じて、グローバルな見地からローカルな問題を考察し、またローカルな課題を解決することがグローバルな社会関係の構築と発展に寄与することを見通した深い洞察が与えられていることであります。しかも、これらのご研究が、「グローバル」と「ローカル」という対比の概念が存在しなかった1970年代に端を発していることは、驚くべきことであります。このようなグローバルとローカルのしなやかな融合の一端は、豊臣秀吉による朝鮮出兵の際に死亡した日本の水軍兵士が葬られている韓国・珍島の倭徳山をテーマにして、学生も巻き込んで制作されたドキュメント「もうひとつの8月15日」が、第23回NHK全国大学放送コンテストのTVドキュメンタリー部門で優勝（合わせて、文部科学大臣奨励賞受賞）されたことにも表れていると思います。

日隈先生は学界や大学という枠を越えて広く社会でもご活躍されました。先生が理事や委員等を務められた団体・組織のごく一部を拾い上げただけでも、厚生省、国土庁、広島県、広島市、呉市、大竹市、三原市、ひろしまネパール文化交流協会、日韓文化交流協会などがあり、これまたグローバルにもローカルにもしなやかにご活躍されていたことがわかります。

本学には2014年度よりグローバルコースと地域イノベーションコースが設けられました。言うなれば、日隈先生が長年実践してこられたグローバルとローカルのしなやかな融合を目指して、ようやく大学としての取り組みを始めたというところでしょうか。その意味では、先生が永眠されて1週間ほどのちにご遺族の方々に本学にお越しいただき、本学名誉教授の称号の授与とともに、先生の長年の地域連携・地域貢献のご功績に対する表彰をさせていた

だいたことは、遅きに失したとはいえ、誠に妥当なことであったと思います。

個人的なことです。日隈先生が急逝される二十日ほど前に、もちろんそのようなことになるとは露ほども想像せず、先生のご退職をお祝いするささやかな会が開かれました。私は不躰にも会に遅刻してしまい、先生が会場を後にされる段になって、ようやくこれまでのご厚情にお礼を申し上げることができました。その際、会の他の参加者のみなさんに向かって「この新学部長をよろしく」と仰っていただいたその声が、今でも私の耳に残っております。さぞかし頼りない人間と感じておられたのだろうと思います。確かに頼りない人間ですので、日隈先生にはご退職後も、大学の外からのお立場で種々ご教示いただきたいと思っておりました。ついでに愚痴もお聞きいただきたいと思っておりました。もちろん、酒気帯びで。このような望みが永遠に叶うことがないことを、1年近く経った今でも信じられずにおります。

最後になりましたが、ご遺族の方々のご退職後の先生との家族団欒の日々を心待ちにしておられたのではないかと推察し、そのご心痛、いかばかりかとお察し申し上げますとともに、改めて謹んでお悔やみ申し上げます。

ここに『広島修大論集』第55巻第2号を刊行するにあたり、これを日隈健一教授追悼号として、先生のご霊前とご遺族にお捧げしたいと思います。

人文学部長

増 田 尚 史